

陳 述 書

原告 天明伸浩

「北陸センター遺伝子組み換えイネ野外栽培」の裁判も最終盤をむかえています。この裁判を起こした原告として、また、これまで陳述書や報告書など（甲42～45）を作成して来た者として、意見を言わせていただきます。

そもそもこの裁判は、上越を中心とした農家やその農家が作った米を食べている消費者が、その大切な農地で「遺伝子組み換えイネ」を栽培することの危険性に心を痛め、野外実験の中止を求めて提訴した裁判です。

この実験と裁判の様子は全国に伝わり、原告への賛同者が多数加わり、地元の原告は多いに勇気づけられました。

なぜ原告に対する多くの賛同者が現れたのか？ それは被告が遺伝子組み換えの野外実験を行うならば、完璧な安全、地元の納得・同意を得てから行うべき物だったにもかかわらず、これらのことを満足する状態をつくらず実験を強行したからです。コシヒカリへの交雑の不安。様々な耐性菌が発生することによって起こる健康・環境被害への不安。地元の理解。新潟コシヒカリのブランドイメージの低下。これらすべてにしっかりとした対応がないまま実験は行われたのです。

被告のこのような強引な態度は、この裁判でも変わることはありませんでした。実験を行うならば多くの人々の不安が解消されるように丁寧に答え、情報を公開し、鑑定にも積極的に参加しなければいけないはずでした。しかしそのような対応は見られませんでした。

この裁判で問われているのは、遺伝子組み換え野外実験によって引き起こされる様々な危険があるかないかです。この時に基本に置くべき考えは、農林水産省の関連団体作成の〈遺伝子組換えハンドブック〉にも〈バイオの分野では、遺伝子組換え食品の安全性に関して、予防原則を基に話し合いが進められている〉と紹介されている「予防原則」です（別紙として添付しました）。温暖化、環境ホルモン、新型インフルエンザなどでも、「予防原則」の考えに基づいてまだ発生していない危険を防ぐために世界中の人が努力していることは周知の通りです。

まだ引き起こされていない危険を予防するためには、データや仮説をもっと謙虚に素直に見る必要があります。科学的なデータの取り扱いを恣意的に

行うことの危険性は「足利事件」で嫌と言うほど知らされました。花粉の生存時間、ディフェンシンの体外流失、耐性菌の発生などあらゆる点で環境に影響を与えないようにするために完璧を期さなければいけないはずの被告は、自分たちに有利になるように恣意的にデータを見えています。これでは危険性を見落とし、大きな被害を引き起こすこととなります。

これまで、被害を発生させた者は「予測不可能だった」の言葉で片付けてしまえます。しかし被害を被るのはいつも普通の暮らしをしている人々や何も言わない自然環境です。今回の裁判ではそのような被害が発生しないように多くの方が尽力し被害を予測しているので、実験が中止されることと思います。

私たち原告はこの遺伝子組み換えイネが及ぼす影響は、自分たちだけにおよぶ物だとは思っていません。上越とつながる地球全体の環境、私たちの世代だけではなく未来の世代。そのすべてに対して影響があることを感じています。つまり私たち原告は、地球全体の自然環境、そして未来の人類を代表しているのです。

この裁判の場で明らかになった「多くの不安があるこの遺伝子組み換え作物」。その野外栽培を一刻も早くやめさせ、私たちの不安が解消されることを願います。

以 上

2009年7月 / 日

天明 伸浩 

新潟地方裁判所高田支部 殿

ボースを糖成分、アデニン (A)、グアニン (G)、シトシン (C)、ウラシル (U) の4種類のうちいずれかを主な塩基成分とするRNAで、この塩基の配列で遺伝情報を写し取る。ウィルスなどでは、mRNAが遺伝情報の原本になりDNAを作ることがある。

☞ モノクローナル抗体

【略語・別称】 単クローン抗体
 【英語表記】 monoclonal antibody
 【よみがな】 ものくろーなるこうたい
 【用語説明】 単クローン抗体とも呼ばれる。均一の分子からなる抗体のこと。化学的および生物学的に単一の性質をもった一つの蛋白あるいはペプチド成分（抗原決定基）に対する抗体。1個の抗体産生細胞は1つの抗原決定基を認識するモノクローナル抗体のみをつくる。同一の化学構造をもつモノクローナル抗体を得ることは、目的とする成分の正確な分析や生体成分の検出・定量・濃縮あるいは精製などに大いに役立つ。たとえば、体内のがん細胞にモノクローナル抗体を接合させ患部を消滅させるような治療や腫瘍細胞等の分離・分析、臨床診断に使用され、急速に発展した。また、大量生産が可能で、免疫学研究用の試薬や、農業・畜産業における細菌検査・ウィルス検査・血清検査などにも用いられている。最近では、細胞融合を使わずに、遺伝子組換え技術で生産できる方法が開発されている。

☞ 予防原則

【英語表記】 precautionary principle
 【よみがな】 よぼうげんそく
 【用語説明】 リスク（危険）を回避するため、未然に対策を取るという考え方。環境・衛生問題の対処基準として国内政策や国際条約に盛り込まれている。1970年代か

ら「海洋投棄条約」などに取り入れられ、1992年に「環境と開発に関するリオ宣言」の中で「環境を守るためには各国はその能力に応じて予防的アプローチを広く採用する。重大なあるいは回復不能な損害の脅威が考えられる場合、十分な科学的根拠がないことを理由に費用効果の高い環境悪化防止策を先延ばしにしてはならない。」と記され、環境問題への基本的な基準となった。身近な例では、地域汚染を減少する可能性として、廃棄物やごみを減らし、リサイクル品を使用すること、医療スタッフが感染予防のため、手袋やマスクを着用することなどが予防原則に当てはまる。バイオの分野では、遺伝子組換え食品の安全性に関して、予防原則を基に話し合いが進められている。

☞ ライフサイエンスサミット

【英語表記】 life science summit
 【よみがな】 らいふさいえんすさみっと
 【用語説明】 自民党ライフサイエンス議員連盟（自由民主党の有志議員からなる議員連盟）、科学技術会議、日本バイオ産業人会議の共催により、バイオ産業の振興について、業界の代表者が話し合うため2000年4月に東京で初めて開催された会合。世界の最先端のライフサイエンスの実現を目指し、資源の投資や独創的な研究を推進すること、バイオベンチャーの創出強化、人材養成などを柱とし、科学技術の成果を社会に還元する組織として機能することを課題としている。2003年で第4回目を迎え、「ポストゲノム」のBT (Biotechnonology) 戦略の取り組みについて議論された。

☞ ラウンドアップ

【英語表記】 Roundup
 【よみがな】 らうんどあっぷ
 【用語説明】 米国モンサント社開発の除

ま
行
や
行
し
行

バイテク小事典の内容やSTAFF情報ギャラリーに掲載した
パンフレットに関するお問い合わせ、その他ご質問等ございましたら、
下記へご連絡ください。

＜遺伝子組換えハンドブック＞

「バイテク小事典」
バイテクQ&A集／バイテク用語集

発行日：平成16年3月（第1版）

作成・発行：社団法人 農林水産先端技術産業振興センター

〒107-0052

東京都港区赤坂1丁目9番13号三会堂ビル7階

電話：03-3586-8644 FAX：03-3586-8277

ホームページ <http://web.staff.or.jp>

バイテクコミュニケーションハウス <http://www.biotech-house.jp/>